

聖書の中でファリサイ派の人々、または律法学者と言いますと、私達は悪いイメージがあります。何故なら主イエスとの議論が福音書の至るところに記されており、主イエスによって偽善者と言われているからです。彼らは主イエスが教えておられたのと同じように律法を重んじるべきことを教え守っていたのですが、その目的は自分たち自身のためでありました。自分たちが人々から尊敬されるため、人々から偉大な指導者であり続けるために律法を守ろうとしていたのです。そこには自分自身への関心はあっても主なる神に忠実に従う心はなかったのです。主イエスはそれを中心に教えを説かれ、正しく神に仕えること、そして神のために律法を守るべきことが大切であると言われたのです。

しかし律法学者たちは悪い人ばかりだったわけではありません。本日の福音書に出てまいりました人のように主イエスに正しい答えをなし、神の国から遠くないと言われるような人もいたのです。主の教えは人知をはるかにこえる力を持っており、求める人の心奥底に入り込んで真理を指し示すのです。

これは主イエスが十字架にかかれる三日前の火曜日であったと言われております。主イエスがこの世でなされた最後の議論がこの箇所になるわけです。最後のところで、もはや主イエスに議論を仕掛けるものもいなくなると書かれておりますが、これは律法学者たちが主イエスに完全に敗北したことを現します。輝くばかりの主イエスの存在に、彼らの暗黒に満ちた存在が破れたのです。彼らは神の前に悔い改め、正しい満ちに立ち返る存在だったのです。そして中にはこの律法学者のように正しい道に立ち返ろうとする人もいたのです。

しかしこの何も言わなくなったというのはただ彼らの敗北を意味しているだけではありません。まず、主イエスによって義と認められた律法学者は、この後仲間と一緒に行動することが出来たでしょうか。それは出来ないことだったのでありましょう。律法学者にとって主イエスは自分たちの罪を指摘する存在であり、人々の人気を自分たちから奪ってしまった人にほかなりませんでした。律法学者にとって主イエスはまさにねたむ存在であったのです。それを正しいと告白したこの律法学者を、どうしてこれから行動を共にすることが出来るでしょうか。

そしてもう一つ、これが主イエスが十字架にかかれる三日前だったことを思い出してみましょう。主イエスを十字架に付けようと一番望んでいたのはファリサイ派の人々と律法学者でした。彼らはこの議論で敗北した後、直ちに主イエスを殺そうと考えたのでした。そして二日の後主イエスを捕えることに成功し、その翌日十字架につけてしまったのでした。時の総督ポンテオ・ピラトが、彼らが主イエスを十字架につけようとしているのはねたみのためであったとわかっていたと書かれていますように、この議論の後彼らのねたみは頂点に達したのです。

さて、このように本日の聖書は、ねたみの持つ恐ろしさを語っていると共に、私達人間の持つ罪の姿をよく現しております。私達は正しいもの前に立つと逃れなくなったり、正しい存在を正面に見つめることが出来ないあまり、邪魔をしたり、悪に陥れようとする場合があります。それは自分自身を正当化するため、自分自身が正しく生きられないことを自他共に認めてもらって安心しようとするのであります。それはファリサイ派の人達が律法学者と共に、私達自身にも言える人間誰しも持っている大きな罪であります。律法学者たちがこの時にしたことは、正しい告白をしたものと共にあることではなくて、彼を仲間外れにして主イエスを殺すことでした。しかし彼らの行動を私達は堂々と批判できるでしょうか。自分はこの正しい告白をした者と一緒であると言えるでしょうか。私達の心の中には主イエスをねたんで殺した人達と同じ気持ちがひそんでいるのです。

主はこうした私達のために十字架にかかってくださいました。そしてご自分の命をかけて正しく生きる、罪から逃れる道を示し、神の前に正しく立つ人間とされるよう促しておられるのです。主イエスを十字架に付けたのはいったい誰でしょうか。その時民衆を扇動したファリサイ派や律法学者たちだけだったのででしょうか。彼らのねたみのみに責任があるのでしょうか。そうではなく人類の持つすべての罪のため、私達自身が罪のうちにあることが主イエスを十字架に付けたのです。その十字架によって導かれ、主のもとに集う私達は、自分たちの至らなさ、神の前にいと小さき者であることを実感して、主の光を輝かせる者として召されているのです。私達の信仰の喜びは、主イエスが示されたように、与えられてくるものではなくて、自らの思いと言葉と行いを通しての業に対して、主の祝福が与えられることでもあります。正しいもの前に正しく立てる者にされますよう、主の導きに従順に歩んでまいりたいものであります。